

<研究報告>

日英語の形容詞の語順の比較*

—old colorful pots が「色鮮やかな古いつぼ」になるのはなぜか—

閨谷 加奈子 松川町立松川中学校
田中 江扶 信州大学教育学部言語教育講座

キーワード：形容詞の語順、主観と客観、強調、因果関係、形態的特徴

1. はじめに

形容詞を2つ以上使って名詞を修飾するとき、(1)のように形容詞の順番を入れ替えることが可能である。

- (1) a. a young ambitious man
- b. an ambitious young man

(1a, b)では、形容詞の young と ambitious の語順が違っている。形容詞の語順を入れ替えた場合、意味やニュアンスが変わってくるのだろうか。

形容詞の位置には制限がないわけではない。

- (2) a. a green wine bottle
- b. *a wine green bottle

(2)では、名詞の bottle を形容詞の green と wine が修飾しているが、(2a)の語順のみ許される。なぜ、(2b)の語順は許されないのだろうか。形容詞の位置や語順を決める原理があるのだろうか。

さらに、形容詞の語順が入れ替え可能な場合でも、好まれる自然な語順と不自然と感じる語順がある。

- (3) a. a small round table
- b. a round small table
- (4) a. beautiful long hair
- b. long beautiful hair

(3)と(4)ともに、aの語順がbの語順より好まれる。なぜ、形容詞の語順には好まれるものと好まれないものがあるのだろうか。

英語と日本語を比較した場合、必ずしも形容詞の語順が英語と日本語で対応しているわけではない。

* 本稿はNeyatani (2010)を修正したものである。初稿の段階で英語教育専修の大学院生の宮澤優氏と周宇氏から貴重なご意見を頂いたことに感謝申し上げます。また、日本語の例文の判断には信州大学教育学部の学生に協力してもらった。深く御礼を申し上げます。また、信州大学外国人講師である Colleen Dalton 氏には英語の例文の判断をして頂いた上に、貴重な助言も頂いたので記して感謝の意を表したい。なお、本稿にまだ残されているであろう不備や誤りは全て筆者らの責任である。最後に、本稿を完成させるまでに議論を重ねてくれた青木美帆、和田優美、望月麻奈美、福井茂木、向井宏典の各氏に心からの感謝を捧げたい。

(5) old colorful pots

- a. 古い色鮮やかなツボ
- b. 色鮮やかな古いツボ

(5)の'old colorful pots'を日本語に訳すと、英語の語順のまま訳した(5a)よりも、形容詞のold(古い)とcolorful(色鮮やかな)の順番を入れ替えた(5b)の方が自然である。英語と日本語の形容詞の語順には違う原理が働いているのだろうか。

2. 英語の形容詞の語順

一般の参考書でも形容詞の語順を扱っているものがあるが、ほとんどが Quirk, et al. (1985)に基づいている。例えば、江川泰一郎(1991: 92)の『英文法解説(改訂三版)』では、形容詞の語順を以下のようにまとめている。

(6) Table 1: 形容詞を重ねる場合の順序

| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | |
|-------|-------|-----|--------|-------|-------|------|--------|--------|
| 限定詞 | 序数 | 数量 | 性状 | 大小 | 新旧 | 色 | 材料・所属 | |
| a | | | pretty | | young | | French | girl |
| the | last | two | | | old | red | brick | houses |
| these | first | | ripe | small | | | | apples |
| Jim's | | | | | new | gray | steel | desk |

実線で仕切られている1から3の順序は決定的であり、順番を入れ替えることはできない。

(7) a. *the last two red apples* [1-2-3-7]b. **last the two red apples* [*2-1-3-7] / **two the last red apples* [*3-1-2-7]

つまり、1から3の順番は文法規則として決定されているものであるといえる。¹ これに対して、点線で仕切られている4から8の順番は「傾向」であって、場合によっては入れ替えが可能となる。この部分が形容詞に関係してくるため、以下で詳しく見ていく。

2.1 Quirk, et al. (1985)の分析

Quirk, et al. (1985: 1340)では、名詞を修飾する位置を4つに分けている。具体的にいうと、限定詞(Determiner)と名詞(Head)の間がZone IからZone IVの4つに区分される。Zone IIが修飾部の中心(central)となり、基本的にはここに典型的な形容詞がくる。このZone IIの前(pre)がZone I (precentral)で、後ろ(post)がZone III (postcentral)になる。そして、名詞(Head)の前がZone IV (prehead)となる。これをまとめたのが、次ページの(8)のTable 2になる。本節では、それぞれのZoneの特徴をまとめた後、(8)のTable 2と形容詞の語順との関係をみていく。

¹ 限定詞 (Determiner) Table 1の1の限定詞(Determiner)には、冠詞・(代)名詞の所有格・指示代名詞・不定代名詞(some, any, every, etc.)がくるが、これらの語は2つ以上重ねることができない。そのため、「あのTomの本」を英語にすると、(ia)ではなく、(ib)のようになる。

(i) a. **that Tom's book* / **Tom's that book*

b. *that book of Tom's*

ちなみに、Svenonius (2008: 25)には、85の言語を調査したところ、限定詞と冠詞の両方が一緒に使える言語は6個だったという報告がある。

(8)

Table 2: 修飾部の4区分

| DETERMINATIVE | PREMODIFIERS | | | | HEAD |
|---------------|-----------------------|---------------------|--------------------------|---------------------|-------------|
| | Zone I: PRECENTRAL | Zone II: CENTRAL | Zone III: POSTCENTRAL | Zone IV: PREHEAD | |
| | | | | attractions | attractions |
| | | | | tourist | attractions |
| | | | | London tourist | attractions |
| | | splendid | | African tourist | attractions |
| our | numerous | splendid | | African tourist | attractions |
| all this | | | costly | social | security |
| a | certain | | grey | church | tower |
| these | | | crumbling grey | Gothic church | towers |
| some | | intricate | old interlocking | Chinese | designs |
| all the | | small | carved | Chinese jade | idols |
| both the | major | | | Danish political | parties |

①Zone I (precentral)

この位置には, *numerous* のような数量を表す語と *certain* のような強調語(emphasizer)が現れる。強調語の場合は叙述用法(predication)がなく, 限定用法(attribution)のみ可能となる。

(9) a. *a beautiful woman* [限定用法] - *The woman is beautiful.* [叙述用法]

b. *a complete fool* [限定用法] - **The fool is complete.* [叙述用法]

(9a)の形容詞 *beautiful* は限定用法と叙述用法の両方が可能であるが, (9b)の強調語 *complete* は限定用法のみ可能で, 叙述用法にはできないことがわかる。

②Zone II (central)

前述したように, この位置には典型的な形容詞が入る。「典型的」な形容詞とは, 以下の4つの基準(criteria)を満たしているものをいう。²

(10) 形容詞の4つの基準

- i. 限定用法がある (*a happy girl*)
- ii. 叙述用法がある (*the girl is happy*)
- iii. *very* で修飾できる (*the girl is very happy*)
- iv. 比較できる (*the girl is happier now*)

ほとんどの形容詞が(10)の4つの基準を満たすため, Zone II は形容詞が現れる中心的な位置と考えられる。

² 形容詞 (Adjective) の基準 形容詞を考える上では「形容詞らしさ」というものを考慮に入れる必要がある。例えば, 形容詞 *infinite* は限定用法はあるが, *very* で修飾できない。

(i) a. *God's infinite mercy* [限定用法]

b. **God's mercy is very infinite.* [very で修飾]

また, 形容詞 *afraid* は叙述用法は可能(*The man is afraid of snakes*)であるが, 限定用法にはできない(**the afraid man*)。つまり, (10)の *happy* に比べ, *infinite* や *afraid* は「形容詞らしさ」に欠けることになる。このように, 形容詞には「典型的(central)な形容詞」と「形容詞らしさ」を部分的にもつ「周辺の(peripheral)な形容詞」があることになる。さらに, 通常, 副詞は(10)の基準を満たさないが, 副詞 *soon* のように *very* で修飾できたり, 比較級になるものもある。

(ii) a. *I'll write to you very soon.* [very で修飾]

b. *The sooner, the better.* [比較級]

副詞にも「典型的な副詞」と「形容詞らしさ」をもつ「周辺の副詞」があるといえる(cf. Quirk, et al. (1985: 403-404)).

③Zone III (postcentral)

この位置には、主に色を表す形容詞や現在分詞や過去分詞などの分詞形が現れる。

- (11) a. *blue* skies [色]
 b. a *working* man / a *deserted* village [分詞形]

④Zone IV (prehead)

この位置には、「最も形容詞的でなく、最も名詞的(least adjectival and most nominal)」な修飾語がくる。

- (12) a. an *American* stamp / a *Gothic* taste [国籍・様式]
 b. a *medical* dictionary / *social* activities [名詞派生(denominal)の形容詞]
 c. *tourist* attraction / *college* students [名詞による修飾]

(12c)の名詞による修飾語がこの位置にくることからもわかるように、Zone IVは限りなく名詞に近い性質の修飾語が現れる位置といえる。その証拠に、この位置に現れる(12b)のような形容詞は、通常、very で強調することもできないし、比較級としても使えない。

- (13) a. *all those **very** *medical* examinations
 b. *The examinations are **more** *medical* than...

(10)で見たように、very で強調できたり、比較級として使えることは形容詞の特性であるため、それができない Zone IV の修飾語は形容詞の特性を欠くといえる。

このように、Quirk, et al. (1985)の分析においては、(8)の Table 2 の分類に基づく語順が自然な語順であることになる((14)の I から IV のローマ数字は Table 2 の Zone I から Zone IV に対応する)。

- (14) a. *certain* *important* people [I + II]
 b. the *same* *restricted* income [I + III]
 c. a *funny* *red* hat [II + III]
 d. an *enormous* *tidal* wave [II + IV]
 e. *certain* *rich* *American* producers [I + II + IV]

そのため、(8)の Table 2 の順序を逸脱すると(基本的には)不適格になる。

- (15) a. a *green* *wine* bottle (=2a)) [III-IV]
 b. *a *wine* *green* bottle (=2b)) [*IV-III]
 (16) a. the *important* *long* *French* novel [II-IV]
 b. *the *French* *long* *important* novel [*IV-II]

(15a)の *green* (Zone III)と *wine* (Zone IV)の順番を入れ替えた(15b)や、(16a)の *important* (Zone II)と Zone IV の *French* (Zone IV)の順番を入れ替えた(16b)は不適格になる。

これに対して、同じ Zone に属するものに関しては、基本的に順序の入れ替えが可能となる。例えば、Zone II の典型的な形容詞どうしは基本的には入れ替えが可能である(以下、(1)を再掲)。

- (1) a. a *young* *ambitious* man
 b. an *ambitious* *young* man

しかしながら、入れ替えが可能な形容詞に関しても、自然な語順と不自然な語順がある。次

節では、英語の形容詞の自然な語順を決める要因について考察していく。

2.2 英語の形容詞の語順に関わる要因

Quirk, et al. (1985: 1339)は、形容詞の自然な語順の「傾向」として、以下の2点を挙げている。

① 大きさ(size)・長さ(length)・高さ(height)を表す形容詞が通常先にくる(以下、(3)を再掲)。

(3) a. a *small round* table

b. a *round small* table

(3)においては、テーブルの大きさ(size)を表す *small* がテーブルの形を表す *round* より先にきている(3a)の方が(3b)より自然な語順となる。同様に、(17a)の方が(17b)より自然な語順である。

(17) a. a *tall angry* man

b. an *angry tall* man

(17a)では背の高さ(height)を表す *tall* が *angry* より先にきているため、(17b)より自然な語順となる。

② 感情的(emotive)・評価的(evaluative)・主観的(subjective)な形容詞が通常先にくる(以下、(4)を再掲)。

(4) a. *beautiful long* hair

b. *long beautiful* hair

(4)においては、「美しい」という主観的、評価的な意味を表す *beautiful* が長さ(length)を表す *long* より先にきている(4a)の方が(4b)より自然な語順となる。

これらのことを踏まえ、Quirk, et al. (1985: 1341)は、形容詞の自然な語順を決める1つの原則(principle)として、主観 / 客観の対立(subjective / objective polarity)を挙げている。具体的にいうと、主観的な意味を表す形容詞よりも客観的な意味を表す形容詞の方が名詞の近くに置かれる傾向にある。

(18) 形容詞の語順に関する原則

[形容詞₁ 形容詞_n] 名詞

主観的 ⇔ 客観的

ここでいう「客観的な形容詞」とは視覚的に観察可能(visually observable)で客観的に認識可能(objectively recognizable)な形容詞のことであり、「主観的な形容詞」とは観察者の判断のような主観的にのみ接近可能(subjectively accessible)な形容詞のことをいう。

(19) a. the two *typical large* country houses

b. the two *large typical* country houses

(18)の原則から、(19a)の方が(19b)よりも自然な語順であることが捉えられる。なぜなら、(19a)では、「典型的な」という主観的な判断を表す *typical* よりも「大きい」という視覚的に観察可能(=客観的に認識可能)な *large* が名詞(country houses)の近くに置かれているから

である(この点に関しては畠山(編)(2011)の第3章も参照)。³

安藤貞雄(2005)の『現代英文法講義』でも Quirk, et al. (1985)と同じような分析がなされ、英語の形容詞の語順が以下のようにまとめられている(安藤(2005: 481))。

(20) Table 3: 英語の形容詞の語順

| | | |
|------------------|------|--------|
| a. both/all/half | | both |
| b. 限定詞 | | the |
| c. 序数詞 | | last |
| d. 基数詞 | | two |
| e. 評価 | ↑ 一般 | nice |
| f. 寸法 | ↑ 的 | big |
| g. 年齢・温度 | ↑ | old |
| h. 形状 | | round |
| i. 色彩 | | red |
| j. 分詞 | ↓ 特殊 | carved |
| k. 出所 | ↓ 的 | French |
| l. 材料 | | wooden |
| m. (動)名詞 | | card |
| n. 主要語 | | tables |

(20)の Table 3 の e から l が形容詞の語順を表している。上述したように, Quirk, et al. (1985) では大きさを表す形容詞や評価的な意味を表す形容詞が先に現れるとしている((3)および(4)参照)。同様に, (20)の Table 3 でも e の「評価」や大きさ(size)等を表す f の「寸法」に関する形容詞が他の形容詞よりも先に現れるとしている。さらに, (20)の Table 3 にあるように, 特殊な意味を表すもののほど名詞の近くに置かれ, 意味が一般的になるにつれて名詞から離れていくことが示されている。ここで, (20)の「特殊的」なものとは視覚的に観察可能(visually observable)で客観的に認識可能(objectively recognizable)な形容詞に対応し, 「一般的」なもの(特に e の「評価」)は主観的にのみ接近可能(subjectively accessible)な形容詞に対応しているため, (20)の Table 3 の e から l の形容詞の語順も(18)の原則に従うものであるといえる。

3. 日英語の形容詞の語順の比較

高校生向けのグラマーの教科書である『Unicorn Grammar - Based English Composition II C』(文英堂, 1989)には, 例文とともに, 英語の形容詞の語順の説明がされている。

(21) They found *many old colorful* pots in the cave.

複数の形容詞の語順 数量→大小→形→性質→新旧→色→材料・国籍

小池(2001)は, 英語では(21)以外の形容詞の語順が容認されないことを指摘している。

³ 形容詞と主観性 形容詞は主観性によって, 現れる構文が異なってくる。

(i) a. It is *dangerous* to swim across the river.

b. The river is *dangerous* to swim across.

(i) では形容詞 *dangerous* が使われているが, 用いられている構文が異なっている。(ia)は「その川を泳ぎ渡る」行為が危険(*dangerous*)であることを客観的事実として述べている。この場合, *dangerous* は *it...that* の構文で使われる。一方, (ib) は「その川」は危険であり, 泳ぎ渡るような無謀なことはやめた方がいいといった話者の忠告を表す。つまり, (ib) の *dangerous* は話者の主観的判断を表している。この場合, *dangerous* は *to* 不定詞をともなった *tough* 構文で使われる。このように, 主観性は形容詞の統語構造に影響を与えるのである(八木(2011)参照)。

(22) a. *many old colorful pots* (= (21))

b. **old many colorful pots*

c. **colorful old many pots*

これに対して、英語では許されない(22)の語順が(不自然さの度合いはあるにしても)日本語では許される。

(23) a. たくさんの古い色鮮やかなつぼ ((22a)に対応)

b. 古いたくさんの色鮮やかなつぼ ((22b)に対応)

c. 色鮮やかな古いたくさんのつぼ ((22c)に対応)

そのため、小池(2001: 55)では英語の語順はきわめて固定的で、文法により強制的に支配されているのに対して、日本語の語順はきわめて自由であると述べている。しかし、(22b, c)が容認されないのは、数量詞 *many* の位置による。2.1 節で見たように、Quirk, et al. (1985)では *many* は Zone I に属するものであり、語順が基本的には固定されている((8)の Table 2 参照)。『英文法解説(改訂三版)』でも、*many* のような数量詞は冠詞のような限定詞とともに順番の入れ替えができない要素として扱われている((6)の Table 1 参照)。つまり、(22b, c)が容認されないのは、数量詞 *many* が形容詞の *old* や *colorful* より後に現れているからである。事実、ネイティブに判断してもらったところ、(22b)と(22c)において数量詞 *many* がない場合は両方の語順が許される。

(24) a. *old colorful pots* (cf. (22b))

b. *colorful old pots* (cf. (22c))

本節では、日本語の形容詞の語順に関する分析をもとに、日本語と英語の形容詞の語順を比較する。

3.1 主観性

『日本語文法ハンドブック』(松岡(監修)(2000))でも、英語の形容詞はおおよそ主観的な判断から規模・色彩・新旧・所属・材料という意味の順で語順が決まっていると書かれている(cf. (20))。

(25) *a nice large white old Italian wooden table*

これに対して、日本語ではこのような語順に対する制限は緩やかであるが、次のような順に並ぶ傾向があるとされている(『日本語文法ハンドブック』: p. 375)。⁴

⁴ 感情形容詞 日本語の形容詞には属性形容詞と感情形容詞があるが、感情形容詞は人称の点で英語と大きな違いを見せる。

(i) a. わたしは悲しい

b. *彼は悲しい

日本語の感情形容詞の場合、主語になれるのは、感情を抱く話し手(疑問文の場合は聞き手)のみである。そのため、(ia)の1人称の「わたし」は感情形容詞「悲しい」の主語になれるが、(ib)の3人称の「彼」は感情形容詞の主語にはなれない。もし、第三者が感情形容詞の主語になる場合は、様態を表す「そうだ」等を付ける必要がある(例: 彼は悲しそうだ)。これに対して、英語の場合は第三者が感情を表す形容詞の主語になれる。

(ii) He is smiling, though **he is sad** at heart. (cf. (ib))

(ii)にあるように、英語では3人称の *he* が感情を表す形容詞 *sad* の主語になれることがわかる。日本語の「悲しい」と英語の *sad* は性質が異なるのである(『日本語文法ハンドブック』: pp. 372-374 参照)。

(26) Table 4: 日本語の形容詞の語順

| 種類・数量 | 主観的評価 | 属性 (大小・色彩・新旧など) |
|--------|-------|-----------------|
| 様々な | よい・いい | 大きい・小さい／大きな・小さな |
| いろいろな | 悪い | 白い・赤い・黒い… |
| おびただしい | すばらしい | 新しい・古い |
| (多くの) | 嫌な | … |
| … | … | … |

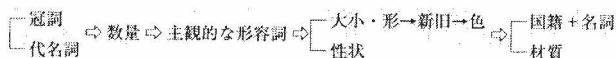
前節で見たように、英語の形容詞の場合も主観的な意味を表すものが先にくることから、(18)の英語の形容詞の語順に関する原則は日本語にも当てはまる、一般性の高いものであるといえる。よって、形容詞の語順に関して以下の制約が成り立つ。

(27) 日英語ともに、主観的な意味を表す形容詞は先に現れる傾向にある。

3.2 本質的特性

2.1 節で見たように、名詞の前には「最も形容詞的でなく、最も名詞的(least adjectival and most nominal)」な修飾語がくる((8)の table 2 の Zone IV)。これを言い換えれば、名詞の本質に関係が深いものほど名詞の近くに置かれる傾向があるといえる(小池(2001: 54)参照)。

(28) *these two beautiful round brown oak tables.*



「名詞の本質に関係が深い」というのは、名詞との結びつきが強いということになる(cf. (20)の Table 3)。(28)では、*oak tables* が「オーク製の机(=木の机)」という意味を表し、1つの名詞句を形成しているといえる。このように、名詞との結びつきが強い修飾語と名詞の間には、何も要素が介在できない。

(29) a. *valuable Chinese teapots*

b. *??Chinese valuable teapots*

(29)の対比にあるように、*Chinese teapots* は「中国製の急須」という意味を表し、1つの名詞句を形成している。そのため、*Chinese* と *teapots* との結びつきは強いため、(29b)のように形容詞 *valuable* が間に入ることができない。⁵

同じことが、日本語にも当てはまる(山田(1995: 404))。

(30) a. 大きい兄ちゃん (「長兄」の意味で)

b. 大きい頼れる兄ちゃん

(30a)では形容詞「大きい」が名詞「兄ちゃん」と一緒に使われ、「一番上の兄(長兄)」の意味を表している。この場合、形容詞「大きい」と名詞「兄ちゃん」の結びつきが強く、間に

⁵ 後置修飾との違い 前置詞句を使って(29)に対応する句をつくると、以下のようになる。

(i) a. *teapots from China of considerable value* ((29a)に対応)

b. *teapots of considerable value from China* ((29b)に対応)

(i)では、前置詞句 *from China* と *of considerable value* がそれぞれ(29)の形容詞 *Chinese* と *valuable* に対応している。(i)にあるように、後置修飾の場合は前置詞句 *from China* と *of considerable value* の入れ替えが可能ことから、(29)の形容詞による前置修飾と(i)の前置詞句による後置修飾では性質が異なる可能性があるといえる(cf. 畠山(2012))。

何も介在できない。その証拠に、(30b)のように両者の間に形容詞「頼れる」が入ると、「大きい兄ちゃん」は長兄という意味にはならない。さらに、次の例を見てみよう。

- (31) a. 美しい青い海
b. 青い美しい海

山田(1995)が指摘しているように、(31a)は「青い海」が1つの名詞句を形成し、それを形容詞「美しい」が修飾している。つまり、「青い海が美しい」という意味を表している。この場合、形容詞「青い」と名詞「海」の結びつきが強いことになる。その証拠に、(31b)のように両者の間に形容詞「美しい」が入った場合、「青い」と「美しい」が並列的に「海」を修飾し、「青く、そして美しい海」という意味になる。⁶ 以上のことから、日本語においても、名詞の本質的な特性を表す修飾語は名詞の近くにくるといえる。よって、形容詞の語順に関して以下の制約が成り立つ。

- (32) 日英語ともに、名詞の本質的な特性を表す形容詞は名詞の近くにくる。

3.3 強調

冒頭でふれたように、(1)は両方とも適格である(以下、(1)を再掲)。

- (1) a. a *young ambitious* man
b. an *ambitious young* man

『実例英文法』では、人柄や精神状態を示す形容詞は *young/old* の前後どちらにきてもいいとしている。そのため、(1)では精神状態を表す *ambitious*(野心的な)が *young* の前後どちらにきても適格となっている。しかし、(1a)と(1b)では強調という点で違いがある。具体的にいうと、(1a)の方が(1b)よりも *young* が強調されている。したがって、年齢の若さを強調したいときは、(1a)の方がよいことになる(『実例英文法』: p. 34)。このことは、英語では形容詞が複数用いられた場合、前に置かれた形容詞が強調されることを示している。

同じことが、日本語にも当てはまる。もう一度、(23a)と(23b)の対比を見てみよう。

- (23) a. たくさんの古い色鮮やかなつぼ
b. 古いたくさんの色鮮やかなつぼ

小池(2001: 55)では、(23a)は「たくさん」あることを強調した表現であり、(23b)は「古い」ものであることを強調した表現であることが指摘されている。つまり、日本語でも形容詞が複数用いられた場合、前に置かれた形容詞が強調されるといえる。⁷ よって、形容詞の語順

⁶ イディオム性 英語においても、イディオム性が強い場合は形容詞と名詞の間に他の要素が入ることができない。例えば、*wild rice*はお米の種類の1つである「ワイルドライス」を表すため、形容詞 *wild* と名詞 *rice* の組み合わせが1つの語と捉えられる(=イディオム性が強い)。この場合、*wild* と *rice* の間には、他の要素が介在できない。もし、他の要素が介在した場合は、イディオム的な解釈がなくなる(Svenonius (2008: 36))。

① *wild Minnesotan rice* (= *uncultivated rice from Minnesota*)

② のように、*wild* と *rice* の間に *Minnesotan* が入った場合は「ワイルドライス」というお米の品種を表すことはできず、「手入れされていない (= *wild*) お米」という意味になる。

⁷ 安くておいしい vs. おいしくて安い 信州大学の学生 31 名に調査したところ、約 9 割の学生が(ia)の語順の方が(ib)の語順よりも自然であると判断した(内訳: (ia)が自然(28名)/ 両方とも自然(3名))。

① a. 安くておいしい店
b. おいしくて安い店

に関して以下の制約が成り立つ。

- (33) 日英語ともに、前に置かれた形容詞が強調される。

3.4 語の複雑さ

小池(2001)でも指摘されているように、日本語の修飾構造においては、複雑な表現が単純な表現の前にくるという一般原則がある(以下、(5)を再掲)。

- (5) old colorful pots

- a. 古い色鮮やかなツボ [短い(古い)+ 長い(色鮮やかな)]
b. 色鮮やかな古いツボ [長い(色鮮やかな)+ 短い(古い)]

(5)の'old colorful pots'を日本語に訳すると、英語の語順のまま訳した(5a)よりも、形容詞の old(古い)と colorful(色鮮やかな)の順番を入れ替えた(5b)の方が自然である。これは、「色鮮やかな」の方が「古い」よりも語として長い(=複雑である)ので、前に置かれる方が自然になるためである。このことは、次の対比からより明らかとなる。

- (34) a. 小さい雪のように白い石 (cf. 小さい白い石)
b. 雪のように白い小さい石 (cf. 白い小さい石)

個人差はあるにしても、「小さい白い石」も「白い小さい石」もともに自然な語順である。しかし、形容詞の「白い」を「雪のように白い」というように複雑にした場合、筆者らには(34a)よりも(34b)の方がきわめて自然な語順であると感じられる。このことは、日本語の修飾構造においては、複雑な表現が単純な表現の前にくるという一般原則が働いていることを示している。

一方、英語の場合はこの原則が当てはまらないといえる。(5)の old colorful pots が自然な語順であることからわかるように、英語では old よりも語として長い(=複雑である)colorful が前に置かれる方が自然であるということはない。2節で見たように、色に関する形容詞は後ろに置かれるため、colorful(色鮮やかな)が old よりも後ろに置かれている(5)は自然な語順となる((8)の Table 2 および(20)の Table 3 参照)。逆に、英語では短い形容詞が先にくる傾向にあることが指摘されている。

- (35) a. a tall handsome student
b. a big important problem

Essentials of Modern English Grammar (Imai, et al. (1995: 92))では、tall や big のような大きさ(size)を表す形容詞と handsome や important のような性質(characteristic)を表す形容詞は入れ替えが可能で、その場合、(35)のように短い形容詞(tall, big)の方が先にくる傾向にあるとし

また、(ia)と(ib)の間に意味やニュアンス等の違いを感じる学生が16名いた。その中で、強調されているものが違うと答えた学生が9名いた。その内、7名が(ia)では「安い」ことが強調されていて、(ib)では「おいしい」ことが強調されていると答えた。これは(33)の制約が適用されていることを示している。しかし、2名の学生が逆のパターン((ia)では「おいしい」ことが強調され、(ib)では「安い」ことが強調)を答えたことから、(33)の制約には個人差がある可能性も考慮に入れる必要がある(4節参照)。なお、(ia)が自然であると答えた学生の内、その理由はわからないとした学生が15名いた。つまり、「直感」で(ia)の方が自然であると判断していることになる。また、(ia)の方が自然な理由については、親から教わる可能性はほとんど考えられないし、学校の国語の時間でも教えていない。つまり、学習していなくても「わかる」のである。形容詞の語順の解明は、母語の「言語直感」の解明にもつながるおもしろいテーマだといえる。

ている。⁸ よって、語の複雑さ(長さ)と形容詞の語順に関して、以下の制約が成り立つ。

(36) 語の複雑さと形容詞の語順

(i) 英語 : [短い — 長い] 名詞

(ii) 日本語 : [長い — 短い] 名詞

3.5 因果関係

日本語と英語の形容詞の語順は、因果関係に関して面白い対比を見せる。もう一度、2.2節の(19)の対比を見てみよう。

(19) a. the two *typical large* country houses

b. the two *large typical* country houses

2.2節では、(19a)の方が(19b)よりも自然な語順であるのは、客観的な意味を表す形容詞 *large*の方が主観的な意味を表す形容詞 *typical* よりも名詞の近くに置かれているためであることをみた((18)参照)。Quirk, et al. (1985: 1341)では、上の対比を因果関係の観点から捉えている。(19)では、形容詞の *large* と *typical* が使われているが、大きい(*large*)ことが典型的(*typical*)な田舎の家であるという判断につながる。つまり、形容詞 *large* が条件(原因)で、形容詞 *typical* が結果を表す。このような場合、英語では結果を表すものが先にきて、原因を表すものが後にくる。そのため、(19a)の方が(19b)よりも自然な語順であることになる。次の対比も同じ観点から捉えられる。Quirk, et al.は(37a)の方が(37b)よりも自然な語順であるとしている。

(37) a. *long straight* hair

b. *straight long* hair

(37)では形容詞の *long* と *straight* が使われているが、ストレート(*straight*)であることが髪が長い(*long*)ことの条件であるといえる。つまり、形容詞 *straight* が条件(原因)で、形容詞 *long* が結果を表す。よって、結果を表す *long* が先にきて、原因を表す *straight* が後にきている(37a)の方が(37b)よりも自然な語順となる。

次に、日本語の例を見てみよう。日本語では、同じ属性を表す形容詞が2つ以上連なる場合には、名詞に近い形容詞以外は「～くて」という形をとることができる。

(38) {小さい / 小さくて} かわいい女の子

(38)にあるように、名詞「女の子」の近くにある形容詞「かわいい」の前では、「小さい」と「小さくて」の両方の形が可能である。しかし、(i)正反対のことをいう場合と(ii)原因と結果の関係にある場合は「～くて」の形が自然である(『日本語文法ハンドブック』: p. 375)。

(39) a. 韓国にとって {近くて / *近い} 遠い国である日本 [正反対のこと]

b. {暖かくて / ? 暖かい} 心地よい部屋 [原因と結果]

ここで注目すべきは、結果と原因を表す(39b)の例である。この場合、「暖かいから心地よい」という意味を表しているため、原因を表す形容詞(「暖かくて」)が先にきて、結果を表

⁸ Binominal と語の長さ 英語の A and B の形(Binominal)においても、前の語が後ろの語より短い方が自然である。

(i) mac and cheese (= macaroni and cheese)

(ii)は「macaroni and cheese」を表しているが、前の語が後ろの語より短い方が自然であるため、(i)では macaroni の短縮形である mac が使われている(Benor and Levy (2006)参照)。(36)の(ii)は英語において一般性の高い制約と考えられる。

す形容詞(「心地よい」)が後にきていることになる。同様に、「人が多くて暑苦しい部屋」というのも「人が多いから暑苦しい」という意味になるため、原因を表す形容詞(「人が多くて」)が先にきて、結果を表す形容詞(「暑苦しい」)が後にきている。つまり、日本語では原因を表すものが先にきて、結果を表すものが後にくることがわかる。⁹

以上のことから、形容詞の語順に関して以下の制約が成り立つ。

(40) 因果関係を表す形容詞の語順

- (i) 英語 : [結果 — 原因] 名詞
- (ii) 日本語 : [原因 — 結果] 名詞

4. まとめ

3節で見た制約を列挙してみよう。

① 主観性制約

日英語ともに、主観的な意味を表す形容詞は先に現れる傾向にある。(=(27))

② 本質的特性制約

日英語ともに、名詞の本質的な特性を表す形容詞は名詞の近くにくる。(=(32))

③ 強調制約

日英語ともに、前に置かれた形容詞が強調される。(=(33))

④ 語の複雑さ制約

- (i) 英語 : [短い — 長い] 名詞
- (ii) 日本語 : [長い — 短い] 名詞 (=(36))

⑤ 因果関係制約

- (i) 英語 : [結果 — 原因] 名詞
- (ii) 日本語 : [原因 — 結果] 名詞 (=(40))

ここで問題となるのが、①から⑤の制約の整合性である。

(41) a. the two *typical large* country houses (=(19a))

b. a *big important* problem (=(35b))

まず、(41a)の場合、主観的な意味を表す形容詞 *typical* が先にきているため、①を満たしている(2.2 節参照)。さらに、大きい(*large*)ことが典型的(*typical*)な田舎の家であるという判断につ

⁹ 日本語の形容詞句の構造 「い」形で終わる普通の形容詞と「くて」形で終わる形容詞では、構造が違うという指摘もある(山田(1995)参照)。

(i) a. [美しい [青い 海]] (=(31a))

b. [美しく 青い] [海]

(ia)は「青い海」という事物に対して、「美しい」と修飾している(3.2 節参照)。これに対して、「美しく」という「くて」形が使われている(ib)は「美しい」と「青い」が一時的な属性として「海」を並列的に修飾している。このように、形容詞が複数使われている場合、その内部構造も考慮する必要がある。また、日本語の場合、名詞を修飾する形が複数ある点にも注意が必要である。

(ii) 大きい本 [形容詞] / きれいな本 [形容動詞] / 病気の本 [連体詞]

さらに、日本語と英語では形容詞に関して「ずれ」があることにも注意が必要である。

(iii) high [形容詞] — 高い [形容詞] / **highly** [副詞] — 高く [形容詞]

(iii)にあるように、英語ではhigh(形容詞)とhighly(副詞)では品詞が異なる。しかし、日本語の場合、「高い」も「高く」もともに形容詞である(「高く」は形容詞「高い」の連用形)。

ながるため、形容詞 *large* が条件(原因)で、形容詞 *typical* が結果を表す。よって、原因を表す *large* が名詞の近くにきているため、⑤も満たしている(3.5 節参照)。(41a)の場合、*large* も *typical* も語の複雑さ(長さ)はほぼ同じであるため、語の複雑さに関する④は関係してこないと考えられる。そうすると、(41a)は語順決定に関連する制約(①と⑤)をすべて満たしているため、整合性があるといえる(②と③の制約が(41a)の語順決定に関連してくるかははっきりしないため、ここでは取り上げない)。

次に、(41b)を見てみよう。(41b)の場合、語の長さが短い *big* が語の長さが長い *important* よりも前にきているため、④を満たしている(3.4 節参照)。しかし、(41b)では *big* よりも主観的な意味を表す *important* が後にきているため、①を満たしていない。それにもかかわらず、(41b)は自然な語順である。つまり、語順決定に関する制約間の整合性がとれていなくても、語順として適格になる場合があることになる。この事実を捉えるには、制約には優先順位(priority)があると考える必要がある。そうすると、(41b)では④の語の複雑さ制約が①の主観性制約より優先されているため適格になると考えられる。さらに、次の対比を見てみよう。

(42) a. 安くてメニューが豊富な店 [短い(安くて) + 長い(メニューが豊富な)]

b. メニューが豊富で安い店 [長い(メニューが豊富で) + 短い(安い)]

④の制約からすると、語の長さが長い「メニューが豊富で」が語の長さが短い「安い」よりも先にきている(42b)の方が(42a)よりも自然であることになる。しかし、小池(2001: 56)は(42a)も極めて自然な語順であるとしている。その理由として、大抵の場合、まず、安いかわいさを考えてから、次に、おいしいかどうかという味のことを考えるからであるとしている。そのため、その流れに合った(42a)が自然な語順となる。小池はこれを「心理的な順序の反映」としているが、安いことをまず考えるということは、安さが重要である(=強調されている)ことになるため、③の強調制約が優先されているといえる。つまり、(42a)が自然な語順であると感じる人は③の強調制約を優先している。一方、(42b)が自然であると感じる人は④の語の複雑さ制約を優先している。このように、どの制約が優先されるかが個人差や言語間の差につながると考えられる。

以上のことから、満たすべき制約を満たしていればいほど自然な語順になるが、制約には優先順位があると結論できる。そうすると、どの場合に、どの制約が優先されるのかという新たな問題を解明する必要がある(このような方向性の研究には最適性理論(Optimal Theory)がある(鈴木(編)(2006)参照))。それと同時に、複数の制約をより普遍的な原則に還元できる可能性も追求する必要がある。例えば、2 節で見たように、大きさ(size)を表す形容詞は色(color)を表す形容詞よりも前にくるという制約がある。¹⁰

(43) *small black purse* (size > color)

¹⁰ 類型論(Typology)から見る形容詞の語順 大きさ(size)を表す形容詞が色(color)を表す形容詞よりも前にくるという制約は、英語や中国語のように形容詞が必ず限定詞の後にこなければならない言語(例: *that red apple* / **red that apple*)に適用され、日本語のように限定詞と形容詞の語順が定まっていない言語(例: あのかいリンゴ / 赤いあのリンゴ)には適用されないという報告がある(岸本・菊池(2008: 99))。事実、筆者らには(a, b)ともに自然な語順であると感じられる。

(i) a. 大きな赤いリンゴ (size > color)

b. 赤い大きなリンゴ (color > size)

なぜ、言語間でこのような違いが生じるのかは、興味深いテーマである。

この制約は、名詞的性質をもつもののほど名詞の近にくるという、より一般的な原則から捉えられる(*Essentials of Modern English Grammar*: p. 92)。

| (44) more adjectival | | ← | → | more nominal | |
|----------------------|------------------------|---|---|------------------|-------------------|
| Genuine Adjective | Verb- related | | | Noun- related | Head |
| large old | developing worn-out | | | Asian cotton | country shirts |

(44)にあるように、形容詞性が強い developing のような分詞は形容詞の近くに現れ、名詞が形容詞的に使われている(=名詞性が強い)cotton のようなものは名詞の近くに現れる。この原則が純粋な形容詞の語順にも当てはまる。small のような大きさを表す形容詞は最も基本的な形容詞の特性(2.1 節の(10)参照)を示すのに対して、black のような色を表す形容詞は名詞としても使えるため、名詞性が強い(例: Black and white are opposites.)。このように、大きさを表す形容詞が色を表す形容詞よりも前にくるという制約は、名詞的性質をもつもののほど名詞の近にくるという一般的な原則に還元できる。

今後の研究では、制約の優先順位と普遍的な原則の追求という 2 つの観点から、形容詞の語順を考えていくことが重要となる。

文献

- Benor, Sarah Bunin and Roger Levy (2006) "The Chicken or the Egg? A Probabilistic Analysis of English Binominals" *Language* 82, 233-278.
- 畠山雄二(編)(2011)『大学で教える英文法』 東京: くろしお出版.
- 畠山雄二 (2012)「項と付加詞の統語的区別の重要性」藤田耕司・松本マズミ・児玉一宏・谷口一美(編)『最新言語理論を英語教育に活用する』pp. 244-253. 東京: 開拓社.
- 岸本秀樹・菊地朗 (2008)『叙述と修飾(英語学モノシリーズ 5)』 東京: 研究社.
- 小池清治 (2001)『現代日本語探究法』 東京: 朝倉書店.
- Neyatani, Kanako (2010) *Comparative of the order of adjectives between English and Japanese*, Graduation thesis, Shinshu University.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- 鈴木良次(編)(2006)『言語科学の百科事典』 東京: 丸善株式会社.
- Svenonius, Peter (2008) "The Position of Adjectives and Other Phrasal Modifiers in the Decomposition of DP," in Louise McNally and Christopher Kennedy (eds.) *Adjectives and Adverbs: Syntax, Semantics, and Discourse*, 16-42. Oxford: Oxford University Press.
- 八木克正 (2011)「英語形容詞の主観性」澤田治美(編)『主観性と主体性(ひつじ意味論講座第5巻)』pp. 149-164. 東京: ひつじ書房.
- 山田敏弘 (1995)「赤クテ大キイ本と赤ク大キイ本と赤イ大キイ本: 装定用法の形容詞が並置された際の前項の形態」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下)』pp. 399-407. 東京: くろしお出版.

(2012年11月21日 受付)

(2013年 4 月25日 受理)